

# ダルマーニュ著の遊戯書について

講師 (体育学担当) 萩原 美代子  
 助手 (西洋服装史) 斎藤 多香子

前回にひき続き、本館所蔵の稀観本で、スポーツ・娯楽に関するものをご紹介します。Henry-René D'Allemagne(1863～没年不詳)著、『100の回顧展：遊戯』(Musée rétrospectif de la classe 100 JEUX)の豪華2巻本である。タイトルページには、1900年の万国博覧会の際に本書が刊行されたことが明示されている。万博のフランス館では100種のもの(例えば照明など)の回顧展が行なわれ、その一部門として遊戯も取り上げられ、本書はその解説書として出版されたもののようである。パリで同時に開催された第2回オリンピックとのかかわりも考えられたが、それとの関連については何も記されていない。ダルマーニュは、本書の刊行後も『器用さが必要なスポーツと遊び』(Sports et Jeux d'adresse, 1903, この内容は、Musée rétrospectif de la classe 100 JEUXの巻Iにほぼ同じである。本館所蔵780.23-A)、『レクリエーションと娯楽』(Récréation et Passe-Temps, 1903)を始めとして、数冊の遊戯関係書を出版している。

遊戯に関する本は、17世紀にフランスなどでもみられるが、最初の体系的かつ教育的遊戯書として評価されているのはドイツ人、グーツムーツ(J.C.F. GutsMuths, 1759～1839)が1796年に著わした『心身の訓練と休養のための遊戯』(Spiel zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes, 俗に遊戯書といわれる)である。グーツムーツは、その後も幾つかの遊戯に関する本を19世紀初期に出版し、遊戯の重要性を説いた。つまり、遊戯は教育的価値だけでなく、道徳的価値があるので、個人のみでなく、国家の発展のためにも重要な問題であるというのである。しかし、その後各国の公教育制度の中に身体教育として定着

していったのは、形式的な集団秩序訓練を主とする体操であった。それに対して、1870年代より再び遊戯の重要性が強調され、19世紀末から20世紀にかけて欧米に、遊戯促進運動やプレイグラウンド運動がおこった。一方、資本主義の確立と労働の機械化に基づく産業社会の成立により、労働とレジャーの分化が進むと同時に、労働の疎外が深まり、レジャーが人間の生活や生の中に個有の意味をもつことが認識されていった。従って、遊戯に関する社会的関心は、19世紀後半よりしだいに高まっていったわけである。遊戯が個体の生活にどんな意味や機能をもつのか説明しようとする多くのプレイ論が台頭するのもこの時期である。

こういった背景の中で、万博展示にも遊戯がとり上げられ、このような豪華な遊戯書が出版されたのであろう。

さて、著者とこの本の内容に触れることにしよう。著者のアンリ・ルネ・ダルマーニュはパリ国立古文書学院出身の著述家、美術批評家で生活と結びつきの強い玩具やトランプ、照明具、装飾品・布地などの展覧会開催に努力したり、文献資料の探索に功績を残しており、応用芸術の分野でも活躍した人物と考えられる。(本館所蔵の『服飾と家具の装飾品』Les Accessoires du Costume et du Mobilier, 383.3-A-1 や『プリント布地』La Toile imprimée 753-A-1の著者でもある。)

この『100の回顧展：遊戯』はI巻が6章、II巻が5章からなり、76項目目の遊戯が集められ、おそらく1900年当時調べ得る限りのフランスでの遊びやスポーツが記述されている。古文書の知識を駆使して、ギリシャ・ローマ時代への言及も多い。各章の標題を掲げると、

I-1. 幼年時代の遊戯 (輪まわしなど)

- ー2. 走り回る遊戯（かけっこなど）
- ー3. 器用さが必要な遊戯（拳玉など）
- ー4. ボール遊び（テニスなど）
- ー5. 玉遊び（ビリヤードなど）
- ー6. 体操（フェンシングなど）

## II-1. 卓上の遊び（チェスなど）

- ー2. 運まかせの遊び（くじ引きなど）
- ー3. 根気のいる遊び（知恵の輪など）
- ー4. 社交的な遊び（鬼ごっこなど）
- ー5. 興行による遊び（宝棒など）

と分類されているが、これらからみると、分類にはかなり苦労したであろうことが読みとれる。（これは逆に遊戯という対象が複数の領域に跨る学際的研究方法によって初めて理解され得ることを示してもいよう）各章はさらに4～10の遊びに分けられ、それぞれの定義、歴史的変遷などが記されている。図版が豊富なことも本書の特徴で、17世紀から19世紀の版画資料が集められている。

一例を挙げると、I-1の幼年時代の遊戯の中の「<sup>ミルソー</sup>輪まわし」についての解説は、まずその定義が述べられ、ギリシャ・ローマ時代の文献から理解されるその頃の輪まわし、輪の材質の変化、遊び方の変化などが、8ページにわたって12枚の図版をはさんで説明されている。（輪まわしがどの

ような遊びかは、図①を参照されたい。）また、フランスに資料を限定することなく、文献の上でも図版の上でも広汎に資料を求め、その博学ぶりには驚嘆を禁じ得ない。さらに、興味深いことは遊戯一つ一つにそれを歌った詩が探し出され付記されていることで、著者は物理的羅列に飽き足らず、人々の心情をも<sup>すく</sup>掬い上げようと努めたことがわかる。この輪まわしにはオランダの17世紀の詩人<sup>カツ</sup>Catsの次のような一篇が載せられている。

むこうの方で軽やかに 回る輪まわし砂地の所  
同じ動きを絶え間なく 時に速く時にゆっくり  
回す子供は気づかない 次々続くこの輪の動きが  
生きる事の姿なのだと 自分の生きる姿なのだと  
（部分訳）

結論でダルマーニユは、幼年時代に接するすべてのものが美的価値を持つものでなければならぬと述べ、この豪華な2巻本が大人のみならず、子供をも読者として考えていたことが推察される。20世紀も終わりに近づいた現在となつては、すでに廃れてしまった遊びも多く、1900年当時の歴史資料としての価値も高い。さらには日本にも存在する遊戯、全く存在しない遊戯を比較しつつ読み解いても、とても楽しく味わい深い一冊といえよう。



①「輪まわし」の解説中の1枚 パリのリュクサンブール公園で輪まわしをする19世紀前期の子供たちの様子。

②「ディアボロ独楽」の解説中の1枚  
18世紀に中国から伝わった独楽遊びにヒントを得たというディアボロ独楽は、19世紀に大流行した。

